トピック

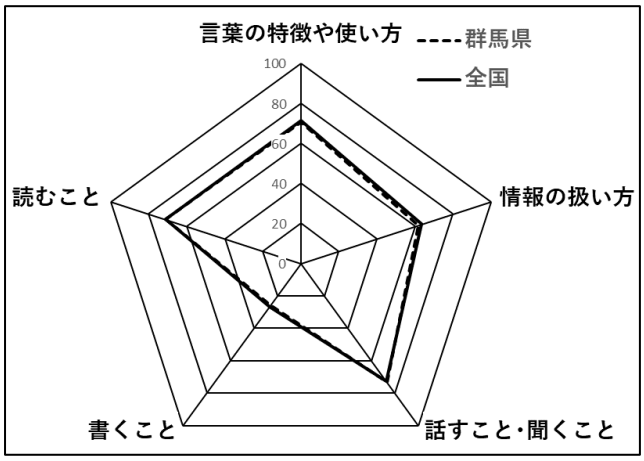
「全国学力･学習状況調査」を考える

ぐんま教育文化フォーラム

やっぱり「書くこと」が苦手？

下の図表は、今年の「全国学力･学習状況調査(以下、「全国学テ」)の小学校国語の調査結果の一部だ。これを見て「『書くこと』が他よりずいぶん低い(＝出来が悪い)なあ」「『書くこと』ってみんな苦手なんだ」と大方の人は考えるのではないだろうか。これを作ったのは国立教育政策研究所の教育課程研究センター。つまり、「全国学テ」の調査主体だ。全国の小６生(964,177 人)の回答と群馬の小６生(14,606 人)の回答を、学習指導要領の内容にある５つの項目に分け、それぞれの平均正答率をレーダーチャートと呼ばれる図表で表している。全国(実線)と群馬県(点線)の正答率にほとんど差がないため実線と点線はほぼ重なるが、５つの項目の内「書くこと」の正答率が全国・県共にとても低いことは一目瞭然。そして、上記の「『書くこと』ってみんな苦手なんだ」の感想に行き着くのは、当然のことだろう。

学習指導要領の内容別平均正答率



この図表は何のため？

ところで、尺度のそろった複数項目(～8 項目位)のデータについて傾向やバランスをつかむのに適したレーダーチャートを、この調査結果であえて用いることの意義は何だろうか。全部で 14 問ある国語問題の５項目毎の内訳は、「言語の特徴や使い方に関する事項」が５問、「情報の使い方に関する事項」が２問、「話すこと･聞くこと」が３問、「書くこと」が１問、「読むこと」が３問。対象の問題数が不揃いで、問題形式も選択式･短答式･記述式とバラバラな上に、そもそも難易度に大きな差のある問題の正答率をレーダーチャートで比較して、一体何を表したかったのか。

この図表は４７都道府県と政令市毎に作られる調査結果に含まれていて、ほぼ全ての自治体で同様の傾向を示す。平易な問題の出来が良く、唯一の難問である「書くこと」問題の出来が悪いことは至極当然で、わざわざ全国一斉調査で図表を添えてまで結果を示す必要はない。

「自分の考え」を書いたら ×

では、この難問(正答率群馬 25.6%･全国 26.7%)である「書くこと」問題とはどのようなものか。

学校で米作りに取り組む小学生の川村さんが、記録していた観察カードをもとに米作りの問題点と解決方法を一枚の「文章」にまとめた、という設定で、そのまとめた「文章」の一部に入る「内容」を記述式で答えるのがこの問題だ。著作権上そのまま問題を記載できないため、結果を含めた詳細は教育課程研究センターの WebPage で参照いただくとして、川村さんが生い茂る雑草に頭を悩ませ、農家の方のアドバイスも得ながらみんなで米の収穫にこぎ着けるまでの過程が、様々な情報とグラフを含んだ「文章」で示される。その最後段でこれまでの問題点と解決方法を 60～100 字で答えることになる。字数以外にもグラフと特定の情報を入れるという条件が課され、それら全てを満たした解答のみが正答だ。教育課程研究センター発行の「解説資料」には、「出題の趣旨」として「図表やグラフなどを用いて、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することができるかどうかをみる」とあり、その上で、採点の基準となる「解答類型」では、100 字ぴったりの正答以外に様々な誤答例が列挙してある。これを見ると、条件を全て満たす正答をするには、「自分の

考え」を書く余地が一切ない。では、あの「出題の趣旨」は何だったのだろうか。

ここまでこだわる理由とは？

ところが、さらに驚くことに「解説資料」の解答類型毎の反応率(正答以外の回答率)を集計した「分析結果と課題」では、「(正答率が低いことから）図表やグラフなどを用いて、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することに課題がある」と指摘する。そして、同じ資料の教員向けアドバイス「学習指導に当たって」にも、「図表やグラフなどを用いて、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫する」との記述がある。

この「図表やグラフ～」の文言にここまでこだわる理由は、実は簡単で、現行の学習指導要領に「引用したり、図表やグラフなどを用いたりして、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫すること(［第 5 学年及び第 6 学年］思考力、判断力、表現力等･B･書くこと)」という文言があるために他ならない。文科省による全国一斉調査である以上、実際の問題内容とのかみ合わせが多少悪くても、建前上学習指導要領を逸脱することは寸分も許されない。とはいえ、964,177 枚もの記述式解答を短時間で採点するのは不可能なので、正誤が判別しやすい発問形式となったのだろう。

それにしても、学習指導要領が金科玉条のごとく扱われる様子は、今更ながら異様だ。また、型にはまった作文が、学習指導要領での「自分の考え」を「書くこと」ではないことは明らかだ。

指導改善が必要なのは…

教育課程研究センターによる「学習指導の改善・充実に向けた説明会」の資料でも、お約束の「図表やグラフなどを用いて、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することに課題がある」とした上で、質問紙調査との相関の高さを引き合いに出して、「自分の考えを他者に伝える工夫をすることが指導改善のポイント」、と強調する念の入れようだ。これが、「自分の考え」を許さない定型作文のみを正答とする「書くこと」問題の結果分析というから、呆れるしかない。

もちろん、「自分の考えを他者に伝える工夫をすること」自体に私たちも異論はない。だが、本レポートの冒頭のレーダーチャートの件とも併せ、こんなでたらめな結果分析が叡智を結集した日本の教育政策の中枢からのメッセージであることに暗澹たる思いを禁じ得ない。「指導改善」が必要なのは、「自分の考えを他者に伝える工夫」どころか牽強付会そのものの結果分析を、勿体らしく教育現場に押し付ける調査主体ではないか。

勝った負けたで騒いでいるのは…

昨年度の群馬県教育委員会会議で、ある委員から「せっかくの全国学テがやりっぱなしになっている」との発言があり、今年度の会議でも別の委員から「報道ではどこに勝ったとか負けたとかそんなことばかりで、県民の意識･興味がそこにしかないのか、報道の仕方がそうだからなのか…」との発言があった。群馬県民が「学テ」の県順位などに興味があるかどうかはともかく、教育現場での「学テ」への視線は全く冷めきっている。それは「教員の多忙」と同時に、「全国学テ」自体が孕む矛盾や課題が、今回示したお粗末な結果分析以外にもあまりに多いことが原因だ。自治体首長･教委･管理職ばかりが騒ぎ立てるランキング争い、そのための事前対策の強要、科学的に無意味なデータしかとれない調査方法、隠されている真の調査目的、民間委託による情報漏洩の危険、膨大な調査費用……。

文科省の掲げる「主体的･対話的で深い学び」のスローガンだけがあちこちで空しく響く中、教員の心身が消耗し、子どもたちの自由な発想や表現が埋もれてゆくことが何よりも悔しい。

ぐんま教育文化フォーラムとしては、この問題を今後もさらに深く掘り下げて考えて行きたい。

（たぶん、つづく）

＊国立教育政策研究所教育課程研究センターURL
https://www.nier.go.jp/kaihatsu/zenkokugakuryoku.html